

文字に耳を澄ませば

近藤 野里

私の研究テーマの一つは「フランス語の発音の変化」についてである。このテーマに関心を持つようになったのは、カナダのモントリオールへの留学がきっかけだ。モントリオールに到着した途端に、それまで五年以上も習ってきたフランス語が突如わからなくなるといふ事態にショックを受けたのだが、それがきっかけで「昔」のフランス語の発音に興味を抱くようになった。ヨーロッパで話されるフランス語を主に学んだ者にとって、カナダのケベック州で話されるフランス語に最初に出会う際に、かなりの違和感を抱くことは必至だろう。この違和感の理由は、特に発音と語彙の違いにある。まず、発音面については、現代フランス語にはない長く発音される母音がケベック・フランス語（以下ケベコワと呼ぶ）には依然として残っていること、また現代フランス語では既に消失してしまった（もしくは消失しつつある）母音が未だに残っていることなどが挙げられる。また語彙面についても、昔はフランスで使用されていたけれども、最近ではそれほど使われていない語彙が依然として日常的に使用されている。こんな出来事もあった。モントリオールに到着してすぐに、現地の女性が私の日用品の買い物に付き合ってくれた。彼女に「自炊するならショードウロンを買わなければね」と言われたのだが、そのショードウロンが何なのか聞いただけではわからなかった。彼女が手に取ったものはごく普通の鍋で、それはフランスのフランス語でいう「キャセロール」に当たるものだった。フランス人にこの話をする と、「ショードウロン」のイメージは大釜で、まさかそんなものは普通の

料理には使わないと言われるものだ。このように、十七世紀にフランスからカナダへ渡ってきた入植者たちが話していた当時のフランス語が、ケベコワの中で生き残っており、同時に、フランス本国でもフランス語が変化していったことが、この二つのフランス語の違いが生じた理由である。フランス人が、ケベコワは訛っていると、農民が話すフランス語だとか馬鹿にするのをよく耳にするが、発音面では現代のケベコワの音韻体系は十八世紀や十九世紀のフランス語とほとんど相違がないので、古風だけでそこまで馬鹿にしなくてもいいのではないのかと複雑な気持ちになる。

大学院に入學後、フランス語に特徴的なリエゾン（単独では読まれな い語末子音字が次の語頭母音とつながって発音される現象）について研究していた。このリエゾンも綴り字の保守性と発音の変化の関係の中に保存されてきた現象と言えるだろう。フランス語にリエゾンが存在するのは語末子音字の発音の変化だったということに改めて思い当り、徐々に昔のフランス語に研究対象が移っていった。博士課程では十七世紀末に出版された二つの文献を用いてリエゾンの発音について調査を行った。録音機器がない時代のフランス語の発音をどのように調べるのかと疑問に思う人もあると思うが、もちろん方法はいくつかある。とりあえず、以下、三つの方法を紹介してみたい。第一の方法は、綴り字自体の変化について観察することである。特に韻文などを見ると、母音の数や、押韻している語末子音字の綴り字などを比較することで、発音の変化がわ

かる。第二の方法は、文法書の調査である。フランスでは、一六四七年にヴォージュラによって書かれた『フランス語に関する覚書 (*Remarques sur la langue française*)』の出版以降、覚書という文法書のジャンルが流行する。このジャンルの文法書は、すべての文法事項について丁寧に説明が施されているわけではない。むしろ正しいフランス語の習得の最終段階、つまり完成という観点を持った文法書の一種と見ることができる。このジャンルが社会的状況と密接に結びついて流行したのは、フランスでは折しもルイ十四世による中央集権的統治が行われ、宮廷の権威が堅固であった時代である。どうやら上流階級へ同化する方法として、言語の完成度に対する新しい関心が生まれ、このような文法書がよく読まれるようになったらしい。そこでは規範についての説明が多いものの、「このように発音してはならぬ」といった禁止事項もしばしば提示されている。特に禁止事項は、そのように発音していた話者が実際にいた証拠となるので、面白い発見が多い。第三の方法は、発音を後世に残すために発音記号を作り、それを用いて記録することで、この方法による文献もわずかなではあるが存在する。このタイプの文献調査は、実際に話されていたフランス語の発音がより想像しやすいのが利点といえる。

このように、方法をいろいろ組み合わせ、昔の発音について調査していくわけであるが、私が特に楽しいと思うのは、文法書を読む作業だ。文法書を読み進めていく間に、文法家にお説教されている気分になることもあれば、「あなたが禁止した発音は現代フランス語では規範になってしまいましたよ。残念でしたねー」と言いたくなることもあり、文法家と対話する楽しみがあるからだ。

ところで私は最近、フランスで話されるフランス語からは消失した長母音に関心を持ち、意味を区別する長さがどのように消失していったのかについて調査している。この研究を始めたのは、国際音声学会の発足に関わった音声学者ポール・パシーによる十九世紀末フランス語の発音が記述された文献に出会ったことがきっかけだった。この文献は、当時確立されつつあった国際音声記号によってフランス語の発音が記述されて

いるため、十九世紀末のフランス語の発音が生き活きと想像できるのが利点だ。文献をばらばらとめくり始めたときは、十九世紀末はそれほど昔ではないし、大して面白い発見はないのではないかと思っていた。しかし、発音記号で書かれていることの何よりの利点はそのまま発音できることなので、さっそく口に出して発音してみた。すると、母音の長さを表す記号がやけに多いことに気づいた。二十世紀初頭出版された音声学関係の本を見ても納得できるような情報はそれほど見つからなかった。その結果、十九世紀末においても消失間近であることが予想できる長母音と、しばらくは消失しない長母音があることが判明した。今度は、長い母音がどんなものか自分の耳で聞いてみたいと思い始めた。そこで、二十世紀初頭においても録音機器が発達していたわけではないため、音声が付き始めた一九三〇年代のフランス映画を見てみることにした。すると、しばらく消失しないと予想できた長母音は、マルセル・カルネの『北ホテル』やジャン・ルノワールの『ゲームの規則』などの作品からも聞こえてくるではないか。特に、アルレットという女優は、期待を裏切らない長母音の保持者であることがわかった。

こうしてしばらくパシーのデータに夢中になっていた。ところがこの間に、一九六〇年代に出版されたフランス語音声学の本で「パシーの声を実際に聞くと」といったくだりを発見した。そうすると俄然パシーの声を聞いてみたくなり、まずはフランス国立図書館をあたってみたのだが、残念ながらパシーの音声データは見つからなかった。結局、最終的に得られた最も確実と思われる情報は、ロンドンの大英図書館に音声データが残っているかもしれないというものだった。ケンブリッジ大学での学会発表の帰り道、ユーロスターの駅から大英図書館が見えて、「いつか必ず！」と後ろ髪を引かれながらバリーに帰った記憶がある。とはいえ、大英図書館に調査に行く夢はいまだ叶っていない。それでも、今後五年以内に叶えたい夢の一つは、今もパシーの肉声をこの耳で聞くことであり続けている。

(こんどう のり)